

微小説

ANOVELS

「虚実の相関」

沙架 りゅう (しやか りゅう)

登場人物

流体工学研究室

：月島 俊 教授

：剣崎 涼 博士課程4年在学

社会工学研究室

：佐々木 教授

ロボット工学研究室

：谷田 一郎 教授

超伝導工学研究室

：小槻 正雄 教授

基礎工学部学生

：松崎 武

基礎工学部学生

：長瀬 裕子



1. 飛び降り

今日も学会に提出するための研究論文を研究室で書いていると窓の外で突然ドサという音がした、「また近所の猫でも悪戯しているのか？」剣崎涼は来月発表するための論文を書くためにいつものように徹夜明けの朝の出来事であった。

30分ぐらいすると外が騒々しくなり窓越しに外を覗くと人だかりが出来ていた。女子学生が顔を手で覆いながら「いやだ、飛び降りだって」他の学生との会話が聞こえてきた。誰かがこの棟から飛び降りたようだ。外に出てみると女子学生が無残な姿で倒れていた。自分はこの棟の中に居たとはいえほんの数メートル先で人が飛び降りたことは何とも言い知れないおもいだった。

10分ぐらいすると警察がやってきて簡単な現場検証をすませ死体を安置所へ送った。朝早ということもあり目撃者はいなかった。現場に一番近くいた私が警察から簡単な事情聴取を受けることになった。

刑事：「お宅の大学はいったいどうなっているのかねえ。ここ3年間で3人も飛び降り自殺があるなんて普通じゃないよ。」

剣崎：「今回の事件も自殺だと思いますか。」

刑事：「まあ断定は出来ないけれど、前回の2人についても同じ女子学生の自殺だったし事件性は少ないと思いますよ。とは言っても仕事上現場検証と聞き込みはちゃんとやりますよ。」

飛び降りた女子学生はこの大学の基礎工学部3年長瀬裕子であった。

死亡時刻2月15日午前7時10分

2. 研究室

剣崎涼の通っている筑紫大学は総合大学で某県の学園都市内部にある。この大学の構内は広く東西に1キロ、南北に3キロほどの敷地をもっている。校舎の数も多く全部で12号棟もあり授業の移動はみな自転車を利用している。

校舎の配置は非常に複雑であり内部の通路はまるで迷路のようになっている。何でもこの大学は学生運動をさせないためにこの様なつくりにしたのだと聞いたことがある。またこの大学には敷地の境界に柵などなく誰でも簡単に入れてしまい何とも物騒な一面もある。剣崎の研究室は工学系の学部で流体工学を研究している12号棟一階の角部屋である。この研究室には月島俊教授と剣崎の他2名の大学院生がいる。剣崎はこの研究室で流体力学の研究をしている。現在博士課程の4年目で博士号が取得のため研究論文の作成に忙しい毎日を送っている。

剣崎の研究室の廊下を挟んで向いにあるのは社会工学の研究室だ。ここの部屋からは時々夜になると焼き魚の匂いがしてくる。何でも時々秋刀魚を焼いて食べているらしいという噂がある。この部屋にいるのは佐々木信也教授だが大学教授というものは何とも怪しい生活を送っているものだ。たしかこの教授は妻も子供もいるはずだが、何故研究室で魚なんか焼いているのだろう。だいたい部屋で秋刀魚なんか焼いていたら煙が出て火災報知器が作動してしまうのではないか。

そういえばこの棟はよく火災報知器が誤作動している。最近では非常ベルがなくても誰も反応しなくなっている。本当に火事がおきたら一体どうするつもりだろうか。以前研究室のメンバーでビールを飲んでいたらこの佐々木教授が「私が作ったビールがあるので一緒に飲みませんか」とこちらの研究室に入ってきた。断るのも悪い気がして「いいですね」と返答すると、何と化学の実験で使う薬品用のポリ容器に入ったビールを持ってきた。私は思わずのけぞってしまった。この教授は化学薬品で使用する容器でビールを作っているのか。佐々木教授はこの容器の蓋を開けると私のグラスにその容器に入っているビールをついだ。「とってもおいしく出来たから飲んでくださいよ」につこり笑いながら佐々木教授は私にそう言った。「ど、どうしよういやだ飲みたくない」私は心の中で叫んでいた。まるでジキルとハイド博士の話に出てくるような飲み物で、これを飲んだらどうかなってしまうのではないか。そういえばこの佐々木教授は以前映画で見たジキルとハイドの主人公になんとなく似ている。私は覚悟を決めてグラスに注がれたビールを一気に飲みほした。「どうですか美味しいですか？」佐々木教授はまたにつこり笑いながら質問した。「え、ええとても美味しいです」何とかその場から逃げたかった私はそう答えた。もう味どころではない早くこの場から逃げなくては「佐々木教授、実は今日約束があったことをすっかり忘れていました。今度ゆっくり飲みましょう」何とかその場から逃げ出すことに成功した。家に帰ると自分の部屋の鏡の前にいき思わず何か変わっていないか確認をしてしまった。それでも翌日も何もなく一安心だった。

しかしそれにしても一体、社会工学の教授が部屋で秋刀魚を焼いたり、化学の実験で使う容器でビールを作っていたり「この教授と深い付き合いをしてはいけない」私は心の中でそう誓っていた。この佐々木教授研究室の隣はロボット工学を研究している。いつも奇妙なロボットが研究室の前の廊下をうろうろしている。この研究室には谷田一郎教授と大学院3人が在籍している。何でも人工知能と自己学習機能を持ったロボットの開発が研究テーマだそうで、出会った相手の形、音、匂いなどセンサーで感知する機能を持っており、このロボットを廊下で放し飼いにして色々な人に出会うことによってどのように成長するかを研究しているらしい。

私がいつもこのロボットに出会うとロボットは「いらっしやいませだっぺ」と挨拶する。「だっぺ」というのはこの土地の方言で一度私が冗談で「だっぺ」と挨拶してか

らこの挨拶が気に入ってしまったようだ。こんなことも研究材料にされてしまうのだろうか、もしこのロボットが世界で認められノーベル賞でもとってしまったら。この挨拶が流行になってしまうのだろうかなどと考えてしまう。このロボットの天敵は時々外から入ってくる三毛猫で、この猫がじゃれてロボットを引っかこうとすると、ロボットは大きな「ピーピー」という警戒音と警告の赤いレーザー光で応戦する。たしかはじめのころは「ワンワン」と犬の振りをしていたと思ったがどうもこの音が一番効果的だったようである。この結末といえたいがい三毛猫の勝ちでロボットは無残にひっくり返されて「助けてー」と研究室の誰かに助けをもとめている。もしかしたらペットの遊び相手用のロボットとして発表したらヒット商品になってしまうのではないかと感じてしまった。

さらにこのロボット工学の向かい側にある研究室では超伝導の研究をしている。この研究室には小槻正雄教授と3人の大学院生が在籍している。この研究室の部屋の前にはいつも怪しげなボンベから白い煙がでていっている。ボンベには液化ヘリウムと書かれており、あと液化酸素、液化窒素と書かれたボンベも並んでいる。液化ヘリウム、液化酸素、液化窒素というのは通常気体を冷却分離して液体に圧縮したものであり液体酸素 (-183℃)、液体窒素 (-196℃)、液体酸素 (-269℃) と超低温の液体で超伝導の研究に利用される。通常は液体としてボンベ等の容器に入っていて体積は気体の時に比べ千分の一程度である。超伝導の研究は超低温で電気抵抗がなくなっていく現象を常温で利用できるようにする研究で、その時冷却用にこれらの液体を利用している。

この研究室でも様々な物質を混合させその混合率を変えて乳鉢でカリカリ混ぜて固まった物の電気抵抗を測るということを繰り返している。そして常温に近い温度で電気抵抗が0に近づく物質を発見するという作業をしている。そのためいつもこの研究室の前を通ると「カリカリ、カリカリ」と奇妙な音が聞こえてくる。時々「キリキリキリー」乳鉢で力を入れすぎたときセラミック同士のこすれる音がする。私はこの音が非常に苦手だ、この音を聞いたたび寒気がする。

以前この研究室の研究生へ冗談で「ごますり用のすり鉢ですったらもっと混合が均一になっていいものが出るかもよ。」と言った覚えがある。ところがその後この研究室から漏れてくる音が「ガリガリ」に変わった。もうあのいやな音は聞こえてこなくなった。私は気になってこの研究室に入っていった。そこで私は仰天してしまった研究室の何人かが食用のすり鉢で試験資料をすっていた。「あ、剣崎さん、以前アドバイスしてもらった方法でやったらいい結果がでましてね。皆にも勧めたんですよ。また困ったら良いアドバイスお願いしますよ。」このたぐいの人種に冗談は言っただけではない、本当に実感した時だった。何はともあれあのいやな音が聞こえなくなったのはうれしいことだった。

3 謎の交通事故

女子学生の飛び降りがあったから3ヶ月がたち5月になった。

結局警察は事件性がなく自殺との見解で終わった。何よりも驚くことはこのビルの非常階段および外壁のいたるところにネットが張られるようになった。外から見ると、まるで棟全体が鳥籠に入っているようだ。この建物はこの大学の有名な建築の先生が設計したそうで時々海外から建築の専門家が見学にきている。その人たちが今のこのビルを見たら一体どう思うのだろうか。今となっては建築の美学とは縁遠い建物となってしまった。

いつものように正面の研究室からは魚の焼ける匂いがしていた。「また佐々木教授が秋刀魚を焼いているんだな」そんなことを思いながら私は研究論文を書いていた。息抜きに廊下に出ると佐々木教授が研究室から出てきた。手には何か新聞紙で包んだ大きな物を持っていた。私は思い切って魚の匂いの原因を聞いてみることにした。「佐々木教授、時々夕方教授の研究室から魚の匂いがしてきますけれど何か焼いているのですか。」一瞬佐々木教授の顔が曇ったように見えた。「やっぱり分かりますか、実は他の人には言わないでほしいんですけれど」佐々木教授が返答をした。やっぱり何かある。私はこの話のつづきを聞きたいと思った反面何か聞いてしまったらまずいことに巻き込まれてしまうような気もした。

しかし好奇心には勝てなかった。「絶対他の人には言いませんから」私が答えると佐々木教授は話した。「実は2年ほど前から妻と子供ににげられてしまってね、女子学生とテニスをやっているところを妻に目撃されたのが原因なんだけれど。いや

いや、私はなにもやましいことはしていないけれど、こんな研究生活をしていると連絡もなしに徹夜になることもあれば、子供の誕生日も結婚記念日も忘れてしまうことだってあるんだよ。以前から愛想をつかされていたのでも何と言いつても受け入れてもらえなかったんだよ。」私は「それと焼き魚とどんな関係があるのですか」と早くことの結末が知りたくてきりだした。「離婚後大学の近くにある6畳一間の安アパートに引っ越してね、いや逃げられたとはいえ慰謝料はしっかり請求されてしまったからね。実は私は秋刀魚が好物で今のアパートで焼いていたら2階の住人から苦情がきて、何でも洗濯物が魚臭くなるからやめてくれと言うんだよ。仕方がないから研究室で焼いて持って帰ってから食べていたんだよ。ほらね」佐々木教授が手に持っている新聞をめくるとそこには焼き秋刀魚が3匹、皿に載っていた。「でもこのことは絶対他の人には内緒にしておいてね。妻、子供に逃げられた大学教授が研究室で魚を焼いていたなんて大学にしれたら首になりかねないからね。絶対だよ。」佐々木教授は何度も念を押すように私にいった。事実を知った私はなんだかちょっと滑稽になったと同時に佐々木教授に少し親近感がわいた。ミステリーな出来事の真相なんて案外こんなものかもしれない。色々な人が想像したり噂を広げることが実話ミステリーの本質なのかもしれない。少し意外な結末におかしな感覚を感じた。「このことは決して誰にも言いませんので安心してください。気をつけてお帰り下さい。」私はどことなく寂しげな佐々木教授の後ろ姿を見送った。

佐々木教授は研究室を出てから車に乗り込んだ。大学の駐車場から東大通に出ると軽快にアクセルを踏んだ、5分程度走ったところで異変がおきた。佐々木教授は突然呼吸困難に襲われた、慌てて窓を開け、大きく深呼吸したがそのとき、突然意識を失ってしまった。車は交差点の赤信号を突っ切り、横の通りからきた車と衝突し車は2転3転した後電柱に激突して停止した。佐々木教授は即死であった。

この事件を私は翌朝大学の掲示板で知った
「佐々木教授は昨日交通事故でお亡くなりになりました。」

その日の午後、刑事が私のところにやって来た、以前私に事情聴取した刑事であった。

刑事：「やあまたあったね。しかしまた君から事情聴取しなければならないとはね」
剣崎：「何故、私が事情聴取をうけるのですか。佐々木教授は事故死じゃなかったのですか」

刑事：「いや形式的なことなんですけれど、昨日佐々木教授が事故に合う前研究室の廊下であなたと佐々木教授が何か話しているのを目撃した人がいますね。一応参考のためにと思ひまして」

剣崎：「確かに昨日の午後六時三十分ごろ私は研究室の廊下で佐々木教授と話していましたけれど。」

刑事：「どんな内容だったか簡単に話してもらえますか。」

一瞬わたしはと惑った。昨晚私は佐々木教授と話した内容は誰にもしゃべらないと約束したばかりだったからである。いくら死んでしまったからといって簡単に約束を破ることに気がひけた。そんな私の態度を見ていた刑事が質問を続けた。

刑事：「いやねえ、ここ数ヶ月に二人の死亡事故がありその死亡事故の参考人が同じ人物とはねえ、いくら事故とはいえ調査が必要とおもひましてね。」

剣崎：「刑事さん、まさか私を疑っているんですか」

刑事：「いや、いやそういうことじゃなくて...昨晚佐々木教授とした話をしてくれませんかね。」

剣崎：「わかりました。佐々木教授は時々研究室で魚を焼いていたようなので昨晚思い切って理由を聞いてみたんです。そしたら奥さんや子供に逃げられて一人住まいのアパートでは二階の住民が洗濯物が臭くなるので魚を焼くと言われて仕方なしに研究室で焼いていたそうです。私が佐々木教授と話した内容はそれだけです。」

刑事：「わ、わかりました。話した内容はそれだけです。また何かありましたら質問させて下さい。今日はこれでお邪魔します。」

刑事は私の機嫌が悪くなったことを察したのかそれ以上の質問はしなかった。

その数日後、あの刑事がまたやってきた。佐々木教授は事故の可能性が高いものの家族の許可を得て司法解剖することになったそうで、結果は体内部からの毒物は一切検出されなかった。また体の外傷は事故によって生じたもので事故の原因につながるようなものは見つからなかった。その他事故車両の検証もおこなわれたがエンジン、ブレーキ等に異常は見当たらなかった。当日の事故車両には研究論文の入っていた鞆と洗車用のブラシとバケツのみが車内にありその他のものは一切なかった。交通事故鑑定の結果については事故当時車は赤信号を無視し横から来た車にノーブレーキで突進していたと判明された。鑑定結果によれば何らかの理由で交差点直前に意識を失ったか自分から突進していったと判断された。

4. 授業

佐々木教授の死亡事故があつてから2ヶ月たち7月になった。

剣崎は大学院の博士課程にいるが大学教授の頼みで熱力学の授業を担当している。この授業は必修科目のため1クラス50人程度の出席がある。特に熱力学の授業に対して学生の興味はなく必須科目という理由だけで生徒数は多かったが皆の顔は一応にやる気のなさをものがたっていた。しかもこの時期はまだ梅雨だというのに冷房は電気代の節約を理由に停止したままだ。冷房が利用出来るのは八月からで実際八月からは夏休みに入る。「ということはこの大学に冷房を使わせない政府の陰謀だろうか。」と考えないとやっていけないほどの暑さだ。特にこの狭い教室に50人も人がいる。(人間一人の発熱量は40W(ワット)から100W(ワット)程度だそう、この教室に50人いるということは2000Wから5000Wの発熱量だ。まてよ5000Wといえば小型の電気ストーブをフルパワーで使うと一台1000Wだから5台分か。道理で暑くなるわけだ。)などと、何人かの生徒に黒板の前で問題を解かせているあいだ剣崎は暑さを逃れようと思考を計算に向けていた。

剣崎が問題の回答の説明を始めた時「この回答はまったく間違っているとはいえないがこの様に解くと解が求まりやすい」と説明していた時だった。回答していた生徒の一人が頭を抱えて剣崎の膝元でしゃがみ込んでしまった。剣崎は事の事態が飲み込めず「どうした。大丈夫か。」と生徒に聞きながら様子を伺った。よく見ると何かつぶやいている「何故だ、何故だ、何故だめなんだ」剣崎は慌ててその生徒に説明した。「君の回答はだめではない、むしろ違う角度で物事を見ようとする姿勢は大事なことで、今回はたまたま答えが合わなかっただけのことで・・・」だめだ。何も聞き入れていない。その生徒はすでに自分の世界に入ってしまった。結局その生徒は剣崎の膝元でしゃがみ込んだまま授業は終了した。こんなことで日本の教育いや未来は大丈夫なのだろうか、次の授業には行きたくない。そういえばこのごろ登校拒否の先生が増えてきたと新聞で読んだことがあるが、切っ掛けはこんなことなのだろうか。

5. 自然発火

剣崎が授業を終え谷田教授の研究室へ向っていた。「今日の授業が終わったら研究室に寄ってこないか大事な話があるんだ必ず一人で来てください。」朝私の研究室へ谷田教授から連絡がはいった。「しまった」剣崎は呼ばれた理由はきつと「だっぺ」の件で注意されるのではと考えていた。剣崎が部屋をノックして中にはいった。谷田教授いつものようにタバコを吸っていた。谷田教授は教授内で一番のヘビースモーカーでいつもタバコは欠かしたことがなかった。

「だっぺ。の件はすみませんでした」剣崎は自分からあやまってしまえと開き直った。一瞬谷田教授は唖然とした表情をしていたが突然大きな声をあげて笑い出した。「は、は、はっ、いや失敬とりあえずかけてくれたまえ。あ、その前に部屋の鍵はロックして下さい」剣崎は部屋の鍵をロックすると谷田教授の数メートル先にある椅子に腰を下ろした。谷田教授は剣崎に話し掛けた「だっぺはよかった、実はそのお陰で自己学習と人工知能に新しい発見ができそうでな、今後も色々ロボットに話し掛けてやってくれないか、どうもあのロボットは君をととても気に入っている様子でデータを解析すると君のことばかり出てくるんだよ」剣崎は唖然とした。柵からボタもちという諺があるけれど冗談から新発見なんてありか。内心怒られるのではないかと思っていたので一安心していた。安心したらこの部屋だけやけに涼しいことに気が付いた「谷田教授、この部屋は冷房が効いているのですか。」谷田教授は返答した。「そうだよ。ここはロボットを扱っている研究室だからね、機械物は熱に弱いんだよ。だから特別大学に頼んでエアコンを設置してもらいましてね。ほら今も私の上部からは冷たい風がきていますよ。実際には人間も熱には弱いんですけどね」谷田教授は話を続けた「いや、今日君を呼んだのはロボットのことでないんだ。確かにロボットのことは感謝しているが、実は偶然私はある事件の重要な真相を知ってしまった。あまりにも事が重大なため自分自身でも整理しきれなくなり誰かに相談したいと思ってね。」「そんな重要な話を何故僕に」剣崎は聞き返した。「いや君が適任者なんだよ。なんせうちのロボットが好きになった人だからね」冗談とも本気とも取れない返答が帰ってきた。

「このことはしばらく口外しないでほしいんだけど…」谷田教授が話し始めたその時、一瞬タバコの炎が膨らんだように見えた次の瞬間、谷田教授の体全体から勢い良く炎が立ち上がった。あっという間に炎は全身に広がっていた。剣崎は自分の前で起こっていることが現実なのか夢なのか解らない状態に陥った。剣崎は直ちに我に返つ

てドアの鍵を開けあわてて廊下にある消火器をつかって火だるまの谷田教授に消火活動をした。ほんの数秒で火は完全に沈火した。直ぐに救急車を呼んだが谷田教授は即死状態だった。しかし一体何がおこったのだろう。まるで体全体から炎があがり自然発火のようだった。

30分ぐらいたち刑事がやってきた。

刑事：「分かっているとは思いますがあなたは重要参考人ということでお話を伺うこととなります。」

6. 喫茶店

谷田教授の事件から一週間が経った。ここは学園都市内の山中という喫茶店で剣崎は月島教授と向かい合って座っている。二人ともこの珈琲は大のお気に入り研究が行き詰まるとよくここにやってきて何時間も考え事をしている。テーブルの上には月島教授がお気に入りの青いファイルが乗っている。この青いファイルには月島教授の研究内容がぎっしり詰まっていて中は数式だらけである。大の大人二人がこの数式の詰まったファイルの前で何時間も無言で座っている様子ははたからみたら異状な光景に写ったに違いない。始めのころは頻りに水を替えに来ていたウイトレスさえも近づかなくなる雰囲気醸し出してた。しかし近頃はここのオーナーとも仲良くなりオーナーはいつも特別な席を用意して待っていてくれるようになった。店内にはいつも月島教授のお気に入りのクラシックが程よい音量でながれている。しかし今日はいつもと違い定番の青いファイルはテーブルの上で閉じられたままだった。月島教授は今回の一連の事件で剣崎が重要参考人となっていることに心配になって剣崎を呼び出したからである。しかし剣崎の重苦しい様子を察してかいきなり本題には入らずにいつものように授業や学生の話始めた。

月島：「先日、君に頼んでいる熱力学の前期試験が終わってからある生徒が私の部屋を尋ねてきて...は、は、はっ、いやまいったよ」月島教授はいきなり思い出し笑いを始めた。

剣崎：「といたしますと、先日私が採点した熱力学の講座のことですか。」当然今回の事件の真相について聞かれるのだと予想していた剣崎は意標を突かれた思いだった。

月島：「いや、あのなんていったっけねえ、君が以前話していた、授業中君の膝元で頭を抱えていた生徒、たしか・・・」

剣崎：「松崎武君のことですか」

月島：「そうそう、その松崎君、いやーまいったよ」月島教授はまた思い出し笑いを始めた。剣崎は内心困っていた。実は先日の試験問題は以前生徒に黒板に書いてもらった内容をそのまま問題にしたにもかかわらず結果は惨憺たるものであった。この松崎君は同じ問題を出したにもかかわらず以前黒板に書いていた間違った解答をそのまま試験用紙に書いてあった。採点も不可をつけざるを得なかった。剣崎はたいがいの人であれば相手の考えを読み取るという特技をもっていた。しかし彼に関してはどうしてもだめだ、理解と予測の範疇を超えている。この科目は必修科目であるため不可をつけるということは生徒にとって大変な問題であることも承知していたが、この状態で社会に送り出して良いものなのかという不安さえも抱いていた。困惑している剣崎をよそに月島教授は話をつづけた。

月島：「実は彼が私の部屋に入ってきて、どうしても単位が欲しいという話をしてくてね。

始めはだめだといったんだが、私も彼には少し興味が湧いてきて本当に理解していなかったのかどうかこの問題について質問してみたんだよ。」

剣崎：「どうだったんですか？」

月島：「そしたら彼はこの問題についての正解も内容も完璧に説明してね。私は何故試験の解答にわざと間違いを書いたのかを聞いてみたんだよ。」

剣崎：「そしたら彼は何といったんですか。」剣崎は内心この返答に非常に興味を持っていて、自分の予測の出来なかった人種に対して理解を深められるチャンスとも考えていたからだ。

月島：「ぴーひゃらら」

剣崎：「な、何といったんですか？」

月島：「だから、ぴーひゃららといったんだよ。」

剣崎は頭の中で地球がひっくり返ったような思いだった。（だめだ完全に自分の理解を超えている。もう彼については考えるのはやめよう。）

月島：「いやー、私も始めは面食らったよ。正直、帰ってくれと言いかけたんだがね、実はこの話には先があるんだよ」

剣崎の心は葛藤していた。（まさか月島教授はこの生徒に単位をあげてしまったので

は、いやそんなことはあるはずがない)しかし物事を途中で止められない性格の剣崎は精一杯の冷静を装い話を聞くことにした。

月島：「実は私の部屋にやってきたのは彼一人ではなかったんだよ。」

剣崎：「と言いますと、他にも単位の要求に来た学生がいたのですか。」

剣崎は内心(そうか、今回の採点は少々厳しすぎたと思うし、何人かの生徒が示し合わせて単位の要求に来ることも珍しくはないことだ。月島教授は皆に単位をあげるため、彼一人だけ除け者にするわけにはいかないのだから仕方なしに単位をあげたのだな。)剣崎はすでに自分の中で話を完結してしまっていた。

月島：「実はその時、もう一人松崎君の彼女と名乗る女性が同行していたね。」

剣崎：「彼女、松崎君に彼女がいたんですか？」

月島：「そうなんだよ、実は単位が欲しいと切り出したのも彼女なんだよ。彼女は自分の点数を彼に分けてあげられないかと言って来てね。」

剣崎：「その彼女は試験が出来たんですか。」

月島：「なに言ってるんだい。君が採点したんだろう、ほらただ一人満点だった子だよ。」

剣崎の頭の中は真っ白になりかけていた。「ぴーひゃらら」の彼女が熱力学の試験で満点でその彼女が彼にテストの点を分けてやってくれとやって来た。剣崎は自分の頭の中を整理しなおそうと必死になっていた。

剣崎：「まさか先生は点数を分けてあげたわけじゃないでしょうね」もう率直に聞くのが一番だと思っていた。

月島：「さすがに点数を分けてあげることはしなかったけれど、彼女が最後に言った一言に感銘を受けて松崎君に単位をあげてしまったんだ。」

剣崎：「彼女は何ていったんです」(もう下手な勘ぐりはしない率直に聞こう)

月島：「彼女は自分が責任をもって彼の面倒をみます。立派な社会人にさせますので私に免じて単位を下さいって言ったんだよ。まあ私も今の妻がいなかったら大学教授などやっていられなかったと思うし、この彼女が何だか私の妻の若いころのように思えてね。」

月島：「そうそう、前置きはこのぐらいにして本題に入ろうか。現在、君は非常に危ない立場に遭遇している。正直いって警察は君のことを疑い第一容疑者と考えているようだ。ここ数ヶ月内に起きた一連の事件についても再調査が始まった。実は先日の刑事が私のところにやってきて君を十分監視するようにいつてきたんだよ。わかっている、私は君の一番の理解者だ君が今回の事件に関与していないと信じているよ。」

剣崎は我に返ってここ数ヶ月に起きた一連の事件を振り返ることにした。

剣崎：「第一の事件は2月15日12号棟の屋上から基礎工学類の女子生徒が飛び降りた。目撃者はいなく同棟の1階の角部屋で論文を書いていた私が音を聞いた。事件性については不明です。」

月島「うむ確かにこの事件に関しては自殺、他殺とも断定できないし、あいにく目撃者もいないことからこれ以上の追求は出来そうもないな。」

剣崎：「では、第二の事件は5月20日佐々木教授はいつものように研究室で魚を焼いたあと自宅に帰る途中に東大通りの交差点で信号無視をし、横からきた車に激突して死亡しました。事故前に研究室を出た直後私と出会って家族の話を行いました。」

月島：「この事件は不信な点といえば信号無視で交差点に突っ込んでいることだな。」

剣崎：「月島教授はこの事件は警察が言っている推測の一つである自殺だとお考えですか。」

月島：「いや、私はそうは思わないね。第一これから自殺しようという人間が魚なんか焼いて持っていくかね。」

剣崎：「確かに。もし自殺だとすればせめて大好物だった秋刀魚を食べてから死のうと思うに違いない。それでは何かの病気が誰かに罠をしかけられたということになりますね。佐々木教授は飛び降りのあった長瀬裕子と何か関係があるのでしょうか、もしかしたら以前奥さんにテニスと一緒にやっていた女子学生とは彼女のことではないのでしょうか。」

月島：「そのへんのところは良く分からないけれど、佐々木教授は生活指導も担当していた先生だし、私には女子学生に手を出すような先生には思えないんだが。」

剣崎：「分かりました。では、病気の線は警察にまかすとして誰かに仕組まれた罠の可能性を追求してみませんか。」

月島：「よし、それでは事故の状況と車内の物証を検証してみよう。」

剣崎：「はい、あの晩佐々木教授は私とわかれた後駐車場に行き自分の車に乗り込んで7、8分走ったところで何らかの影響で意識を失い赤信号に突っ込んでいった。もし犯人がトリックを仕組んだとして遠隔操作で佐々木教授の意識をなくしたとしてもそんなに都合よく事故死をおこさせることが可能なのでしょうか。」

月島：「そのことは私もひっかかっていたんだが、もう一つ車につんであったポリバケツとブラシというのも何かしっくりこないんだよ。」

剣崎：「でもそんなもの私の車だって積んでありますよ。このあたりでは洗車場があり

簡単に洗車ができるから時間のあるときにいつでも洗車できるように普段から積んでいるんですよ。」

月島「まあそうともいえるが、とりあえず次の事件を追ってみよう。」

剣崎「はい、第三の事件は佐々木教授の死亡事故の2ヶ月後7月7日私が谷田教授の部屋に来るように呼ばれていましたので授業が終わった午後2時30分頃谷田教授の部屋を訪れた時、話を始めてから数分後、突然谷田教授の全身から勢い良く炎が舞い上がりました。」

月島：「この事件に関して君は決定的に不利な状況にいると思うのだが、なにせ事件がおきたときドアには鍵がかかっており谷田教授と君の二人が密室状態にいたわけだからね。何故ドアに鍵など掛けていたのかね。」

剣崎：「あの時、私が谷田教授の部屋に入ると谷田教授は私に部屋の鍵を掛けてくれたといいました。そして谷田教授は私にこういいました。私は偶然ある事件についての重要な真相を知ってしまったとか。さらにはこの件に関して相談したいが、その相手として私が適任者だとか。その直後あの発火事件が起きたのです。」

月島：「この話を聞く限り谷田教授はある事件の何か重要な真相を突き止めた。そのことを犯人に知られたため口封じのために殺害されたと考えられないかい。」

剣崎：「私もそう思っていますが、なにせ殺害にしてもその方法が特定できません。いくら火元がたばこだったとしてもいきなり全身から発火するなんてありえないことです。もしそうであっても谷田教授は私が部屋に入る以前からタバコを吸っていたので、その前に引火してもおかしくない筈です。また警察の調べでも谷田教授の着ていた服は普通の綿だったそうで発火するような素材ではないそうです。しかもその後の検死の結果谷田教授は部分的に発火したのではなく全身が勢い良く燃えていたそうです。この点については現在警察でも検証を行っていますが、人間がこの用に全身から発火するよなことは通常では考えられないそうです。」

月島：「そうだね、この事件についてはかなり不信なことだらけだけれど犯人が何らかのトリックを使ったと考えるべきだね。おそらくこのトリックを見破ることがこの事件の鍵を握るんじゃないかと思うが。」

剣崎：「はい。私にふりかかった火の粉ですので何とかこのトリックを解き明かし、身の潔白を証明してみせます。」

剣崎は月島教授との会話の中で自分のすべきことになんとなく自身が沸いてきた。（そういえば研究に行き詰まったときいつもこの喫茶店で解決しているような気がする。だれにでもそんな空間があるのだろうか。）そのとき喫茶店のマスターがやってきて新しい珈琲を試飲してもらえませんかと私たちの前に何ともいえないいい香りする珈琲をおいていった。これもマスターの気遣いなのであろう。剣崎と月島教授は珈琲を飲み干すと喫茶店を後にした。

7 虚実の真相

例の発火事件の解明がつかないまま1週間がたってしまった。剣崎は事件に巻き込まれた不安を抱えながら博士論文の最後の追い込みにかかっていた。その時突然研究室のドアがガチャとあき数人の刑事と警察官が入ってきた。

刑事：「剣崎涼、谷田教授殺害容疑で逮捕する。」刑事の手には逮捕状が広げられていた。剣崎涼は何の釈明する手段を失っていた。この状況で論理的な釈明が出来なければかえって自分を不利な状況へ追い込んでしまうと感じたからである。あの刑事が剣崎ところへ寄って来て「観念するんだな」と手錠を掛けようとしたその時であった。ドアの入り口からあの聞きなれた声がした。

「涼犯人じゃないだっぺ、わたし真犯人しってるよだっぺ。」

なんだこいつは一人の刑事が足元で走り回っているロボットを捕まえようとした。その時ロボットの後ろには月島教授が立っていた。

月島：「刑事さん。ここで剣崎君を逮捕すると誤人逮捕になりますよ。私はこの1週間この事件の真相を求め、ついに真犯人とこの一連の事件に関する重要な目撃者をつきとめました。これから事件の真相を説明しますのでこのフロアーの全員を集めてもらえませんか。」

刑事は一大学教授などにこの事件の真犯人など解明できる訳がないと思ったが月島教授は剣崎の指導教官でもあり大学への報告等に協力してもらおうという思わせもあってとりあ

えず話を聞くことにした。

刑事：「月島教授、あなたのご希望通りこのフロアーの全員をここに集めました。さあ真犯人とやらを挙げてもらいましょうか。ただし、出来なかった場合は彼をしょっぴくこととなりますけれどよろしいですな。」

月島：「いいでしょう。ではこの事件の真相について説明します。第一の事件は2月に起きた長瀬裕子さんの飛び降り事件、これは自殺、他殺とも判断が難しいところで

すので後ほど説明しましょう。第二の事件は佐々木教授の不明な事故死、この事故につきましても自殺と他殺の両方の見解があります野で…」と言いかけたところで刑事が話の中に割り込んできた。

刑事：「月島教授、もういいです。やはり何も分かっていないんじゃないですか。我々はこの事件は次のように解明しています。長瀬さんと佐々木教授は自殺と断定しています。我々は佐々木教授が離婚した原因が長瀬さんとの不倫関係であることを突き止めています。実際離婚のきっかけになった佐々木教授が女子学生とテニスをしていて相手は長瀬さんだたことを佐々木教授のも元奥さんが証言しています。佐々木教授はこのことが大学にばれるのを恐れていました。しかし事故の数日前からこの噂が大学内で広まり逃げられなくなった佐々木教授は自殺を遂げたのです。車で赤信号に飛び込んでいったのは保険金をもらうためにお金で元奥さんと子供への慰謝料を払うつもりだったのでしょうか。谷田教授に関しては我々も事件の解明をしています。ここにいる剣崎容疑者はそこにあるへんてこなロボットに変な言葉を吹き込んだ。このことは谷田教授の研究に重要な支障を与えた。怒った谷田教授は剣崎容疑者を研究室に呼び出し今度の博士論文の審査では承認しなことを言われたのではないですか。実際谷田教授の研究室のデータには剣崎容疑者のことが一杯出てきましたからね。この辺のところも警察の鑑識で調査済みです。また谷田教授は剣崎容疑者の博士号取得の審査員の一人であったことも確認しています。剣崎容疑者は同じく審査員のひとりだった佐々木教授についても長瀬さんの件を黙秘する条件で博士号の審査の合格を約束させたんじゃないでしょうかね。まあ真相はこんなところですかね。皆さん時間を取らせました。どうぞお引取り下さい。」刑事が剣崎容疑者に手錠を掛けようとした。

月島：「どうも刑事さんは人の話を最後まで聞けない正確らしいですね。私は事件の真相を解明したと言った筈です。」

刑事：「分かりましたよ。5分だけ時間をあげますから好きなだけしゃべってください。その後剣崎容疑者は連行していきますからね。」

月島：「刑事さんの邪魔が入りましたけれど解明を続けます。谷田教授は剣崎君を呼び出したときこう言っています。私は偶然ある事件の重要な真相をしってしまった。確かにこの言葉は剣崎君しか聞いていませんので証拠としては薄いかもしれませんがこの事件解明の重要な手がかりと考えたのです。そしてとうとうその証拠をみつけました。これです」

月島教授の手には一枚の写真があった。

月島：「そうですこの写真には犯人が写っています。写真にはそうです。小槻教授あなたが写っています。しかも液化酸素のボンベからポリバケツへ酸素を流している姿が。」

月島が指した先の小槻教授の顔から血の気が引いた。

月島：「このバケツどこかで見覚えがありませんか。そうです事故死にあった佐々木教授の車にあったものと同じです。しかも日付は5月20日18時20分となっています。佐々木教授が車に乗る直前のことです。」

小槻：「な、何を言っているんだ。そんな写真どうせ合成に決まっている。それに酸素なんかで人が殺せるもんか、言いがかりだ」

月島：「確かに酸素では人は殺せないかも知れませんが気を失わせることは出来ます。酸素過呼吸というのを知っていますか、ほらコンサートなんかで若い女性がキャーキャー言っているうちに失神してしまうあれですよ。今回の場合は液体酸素をバケツに入れてあります。液体酸素はポリバケツなどに入れておくと数分で気化してしまします。特に車などで揺れている場合にはね。このポリバケツに液体酸素を5リットル入れたとします。これが気化した場合体積は800倍に増え車内の酸素濃度は一騎に60%になります。佐々木教授はこの状態を呼吸困難と勘違いし慌てて窓を開け大きく深呼吸した。コンサートで失神した女性の処置はビニールの袋などで酸素を与えないことです。佐々木教授はこの時点で過酸素症に襲われて失神したと考えられます。」

小槻：「何をそんな可能性ばかり言っているんだ。そんなやり方で佐々木教授を殺害出来る可能性はせいぜい30%程度じゃないか。そんなの証拠になるか。」

月島：「とうとう白状しましたね小槻教授、私はその数字を待っていたのですよ。そうですあなたが概算した通り30%の可能性です。一見30%しかない可能性でもそれは逆に考えると70%しか失敗しない可能性ということになります。いいですかもし70%の可能性を2回続けて実行したと考えてください。その確率は70%掛ける70%で49%です。さらにもう一回つづけた場合34%になります。これは成功確率66%となります。すでにお分かりでしょう、あなたはこの犯罪を確定させないように成功確率の低い方法を選んだ。そしてもし失敗しても再度やり直せる方法を考えた。そうです、車の窓を開けてしまえば酸素は拡散してしまい証拠は一切残らない。万一事故に遭わなくても本人さえ気がつかない。それを何度か繰り返せば高確率で事

故を引き起こせる。あなたは飛び降りて死亡した長瀬裕子さんと不倫関係にあった。長瀬裕子さんは妻子持ちの男性と不倫関係にあることを当時生活指導をしていた佐々木教授に相談していた。佐々木教授は落ち込んでいる長瀬裕子を元気づけるためにテニスに誘ったのでしょうか。運悪く奥さんに見つかり離婚の原因となってしまいました。実は長瀬さんは不倫の相手のことは誰にもしゃべっていないのです。むしろそれが発覚しそうなことにたいして小槻教授をかばうために飛び降り自殺をしたんだと思います。あなたは佐々木教授にこの真相がばれたと思い殺害を計画した。しかしあまり確定的な殺害方法を選んでしまえば今度は自分が疑われてしまう。そこで確率的な方法を選択したのです。別に佐々木教授が死ななくても大学教授に復帰出来なければよいか、または事故の影響で口が聞けなくなってしまうよいかと考えたのではないですか。ここにもう一枚重要な証拠写真があります。

2月14日長瀬裕子があなたにバレンタインのチョコを渡している写真です。彼女の目からは涙が流れているところが写っています。もう一つ何故これらの写真があるか説明しなければなりませんね。実は目撃者はここにいるロボットなのです。このロボットは人工知能と自己学習機能を備えたロボットで新しい人や場面に出会うとその情報を常に記憶します。当然画像解析により人の表情など読み込むため小型カメラを内蔵しています。そしてこれらの写真をデーターとして取り組む仕組みです。谷田教授はロボットのデーターを整理していて偶然あなたの犯行に気がついてしまった。事件の第一容疑者とされていた剣崎君が谷田教授に呼ばれたことを知ったあなたはあわてて谷田教授殺害の犯行を計画した。」

小槻：「ちょっとまで谷田教授まで私が殺害したというのか、だいたい当時そこにいる剣崎と谷田教授は鍵の掛かっている部屋に二人でいたというじゃないか、そんな密室でどうや

って私が谷田教授を殺害出来るんだ。」

月島：「そうです。そこが最大の謎だった。ある一枚の写真を見るまではね。ここにその証

拠があります。あなたがバケツをもって廊下を歩いている写真です。その中にはやはり液

体酸素が入っていた。しかもあなたが液化酸素をバケツに注いでいる現場をロボットに目

撃されている。確かにデーター探したがあなたが液化酸素をバケツに注いでいる絵は佐々

木教授の時の一枚しかなかった。あなたはこのバケツの中身をただの水と言い張るつも

りだろうが、このロボットは画像以外にもデータを蓄積することをご存知だろうか。そう

で画像データがないのはあなたが液体酸素をバケツに注いでいるのは2度目だからで

す。しかし人工知能の記憶データに次のように入力すると、あなたの行動が表示されました。」

月島は1枚のデータ用紙を見せた。そこにはこう記載されていた。

入力：小槻教授 7月7日

出力：バケツ、液化酸素、注入

月島：「あなたはバケツに注入された液体酸素を谷田教授の部屋の外にあるエアコンの室外機に注いだ。そう液化酸素は気化して高濃度の状態で谷田教授の上部にあつたエアコンの噴出し口から流れた。あなたは谷田教授がヘビースモーカーであつたことを知っていたため、この酸素を利用して研究室のデータを谷田教授と一緒に焼いてしてしまおうと考えた。たしかに酸素は自分では発火しないが支燃性ガスとしてはかなり強力なものです。用は可燃物と火種さえあればそこに高濃度の酸素があると爆発的に燃焼する特性を利用したのです。あなたは剣崎君と一緒にいたことも利用して出来れば資料も燃えてしまえば良いと考えたのでしょうか。第一液体酸素を取り扱っていたあなたがこのことを知らないはずがない。なにしろこの液体を取り扱うには危険物取り扱ひの免許が必要になりますからね。あなたが酸素を使用した記録は酸素ポンベの発注記録をみれば明らかでしょう。」

小槻：「こんなロボットが目撃者とはな、こいつは俺になかなか寄り付かなかつたせいかそんな機能があるとは知らなかつたよ。こいつがいなければ谷田教授も死ななくて済んだのにな。」

突然小槻教授は廊下に飛び出し走り出した。

刑事：「しまった。直ぐにやつを取り押さえろ。」

小槻教授は自分の研究室の前まで逃げると液化ヘリウムと書かれた容器の蓋をあけた。次の瞬間小槻教授は容器を頭の上まで持ち上げ頭の上で一気に容器をひっくり返した。その瞬間あたり一面真っ白になりまるで霧のなかにいるようであった。その霧が序所に晴れてきたかと思うと我々の目の前に壮絶な光景が浮かんできた。それはま

るでロウ人形のような液化ヘリウムは -269°C もありあらゆる物体を一瞬で凍らせる能力を持っている。小槻教授の体はまさに超伝導状態になっているであろう、まさか自分の研究目的を自分で体験することになるとは。

エピローグ

あの凄惨事件から半年がたった剣崎涼は博士号を取得し論文の締めくくりをしていた。あの事件以来大きく変わったことといえば2つある。1つは以前出入りしていた三毛猫は私の研究室にいついてしまった。今わたしの足元で好物の秋刀魚を食べている。もう一つはこの猫の横で「にゃーにゃーだっぺ」となっている。谷田教授のロボットだ。ロボットと猫は今では大の仲良しとなりいつも一緒にいる。新しい教授が谷田教授の研究を引き継いで、何でも谷田教授のテストは大成功だそうで、現在第2号機が研究室の廊下を歩き回っている。このロボットは私になついてしまったためデータをとると私のことしか出力しなくなってしまったそうで、私がゆずりうけることになった。わたしはこのロボットの中に谷田教授や佐々木教授が生きているように思えることがある。おそらく彼らの行動や感情を学習してきたせいだろうか、やけに人間臭い一面を見ることがよくある。いまでは猫語もおぼえ新しい新化を遂げているように思える。しかし時々変なことを言うようになった。今日も研究室はロボットの声でにぎやかだ。

「ぴーひゃらら、ぴーひゃらら、だっぺ、だっぺ、だっぺー」

[Back](#)